他者との生き方を探る

人間学のキーワード

# コンタクト・ゾーン

## Contact Zone

田中雅一（たなかまさかず）　京都大学教授

異文化理解を目的としてきた文化人類学は従来、西欧社会との接触が少なかった場所や地域を優先して研究してきた。他の文化との接触により「純粋な」文化や社会が変化し、損なわれてしまうと考えたからである。そうなる前にフィールドに赴き、異文化を生きる人びとの姿を書きしるしておく必要がある、そんな使命のもと、人類学者はフィールドに旅立った。しかし、人、もの、情報が大規模かつ高速に、地域や国境を越えて世界中を隅々まで移動する現代社会において、西欧近代の影響はほぼ世界中に浸透している。とするなら、文化人類学の使命はもう終わりつつあるのだろうか。

わたしは一九八〇年代初頭にスリランカの漁村で調査をした。村民のほとんどはスリランカでは少数民族のタミル人で、ヒンドゥー教徒の漁民カーストであった。それから三〇年、シンハラ人との民族紛争が激化し、多くのタミル人が、難民となって故国を離れることになった。村人たちも例外ではない。ロンドンの郊外には現在、およそ一〇〇〇人の調査村出身者とその子孫（以後、村人とする）が住んでいる。

村人たちは同じ地域に住み、訪問し合う機会も多い。家庭ではタミル語を話し、スカイプでスリランカの親戚とおしゃべりもする。近くにはヒンドゥー寺院があり、居間に暖炉のあるイギリス風の住宅のなかには、ヒンドゥー教の神様を祀（まつ）る祭壇がある。しかし、職業を見れば、漁業に従事する者は皆無で、男女ともスーパーのレジ係が圧倒的に多い。子どもたちは、タミル語より英語が得意になってきている。親も子どもたちも、もうスリランカで暮らそうとは思っていない。二世、三世ともなれば、村出身でない相手と結婚する者も出て来るだろう。「純粋文化」の探求という文化人類学の伝統的な使命から考えると、在ロンドンのスリランカ難民たちの暮らしのなかで、調査の対象となりうる領域はどんどん狭まってきている。それでは、彼らの生活は研究に値しないのだろうか。

文化人類学が今日提唱する「コンタクト・ゾーン」という概念はまさに、こうした問いに対し「そんなことはない、難民生活の研究は意味がある」と答えるために生み出されたといっていいだろう。コンタクト・ゾーン（接触領域）は、異なる文化背景を有する人と人との接触（ときには動物と人の関係にも適用される）によって生まれる場所、領域を指す。移民、出稼ぎ、観光、交易、国際結婚、留学、難民、密出入国などという形で、人が境を越えて移動すると、いままでと異なる風習や考え方のもち主と出会う。そこがコンタクト・ゾーンなのである。そこには、さまざまな軋轢（あつれき）が生じる。差別や偏見、陰湿な苛（いじ）めもあるかもしれない。しかし、一方でコンタクト・ゾーンにおいて人びとは、力を合わせて問題解決に挑み、共生の方法を模索している。そして、いままでとは異なる文化が創出されようとしている。

いま、コンタクト・ゾーンがあらたなフィールドとして注目されるのは、もはや純粋な文化など存在しないといった消極的な理由からではない。そこにはグローバル化が進む人類社会における、多様な他者との生き方のヒントが隠されているからなのである。